

# There 構文における格付与とその帰結

森竹 希望<sup>1</sup>

## 1. 導入

本論は *there* 構文における格付与に関して考察を与える。(1)と(2)に本論が説明対象とする *there* 構文のデータを示す。*There* 構文では *associate*(意味上の主語)には主格付与が許されず対格付与のみが許される。

(1) There is only me/\*I in the garden. (Sobin (2014: 386))

(2) \*There's I. (Schütze (1997: 136))

本論はこれらのデータを Chomsky (2013, 2015)が提唱する Labeling Algorithm の枠組みに基づき説明する。

そして、その分析を拡張し、英語の Left Dislocation や Mad Magazine Sentence、Absolute Gerund に対して説明を与え、さらに日本語の対格付与と scrambling の関係に関しても新たな説明を与える。

## 2. 先行研究とその帰結

Epstein, Kitahara, and Seely (EKS) (2019)は以下にまとめられる格付与方法を提案している。

(3) ある集合に含まれている名詞句と定形の T もしくは他動詞の Root がいわゆる Spec-Head 関係にあり、その集合に対して label を提供する場合、名詞句に構造格が付与される。

ここでの label とは、主格の場合は<uCase, vTense>、対格の場合は<uCase, vTransitive>を意味する。また、Hayashi (2021)は以下の Immediately Contain の概念、及び格付与方法を提案している。

(4) a. Immediately Contain  
A set A with label L immediately contains an SO X iff X provides (part) of L. (Hayashi (2021: 47))

b. Given the following structure and some operation that can assign [F']  
{<sub>γ</sub> {<sub>β</sub> Z [F], ...} {<sub>α</sub> X [uF] {...Y [uF]...}}}  
then, the interpretation of [uF] on Y may be [F] or [F'], whereas [uF] on X has to receive the interpretation of [F]. (Hayashi (2021: 48))

(5) a. The set labeled <phi, phi> by a nominal and T assigns nominative Case to a nominal contained.

b. The set labeled <phi, phi> by a nominal and R assigns accusative Case to a nominal contained.  
(Hayashi (2021: 212))

本論はこれらの提案を統合し、格付与は以下の条件に基づいて行われると提唱する。<sup>2</sup>

(6) a. 名詞句が<uCase, vTense>に直接含まれる場合、主格付与は義務的である。一方、名詞句が当該の label に間接的に含まれる場合、主格付与は随意的である。主格付与がなされない場合、言語特有のデフォルト格が与えられる。

b. 名詞句が<uCase, vTransitive>に直接含まれる場合、対格付与は義務的である。一方、名詞句が当該の label に間接的に含まれる場合、対格付与は随意的である。対格付与がなされない場合、言語特有のデフォルト格が与えられる。

## 3. There 構文に対する説明

本論では *there* 構文における格付与の実態を明らかにする前に、属格が付与される分布を具体的に観察する。まず、属格は(7)で示されるように、[uCase]を持つ名詞句と[vGenitive]を持つ D head が label を提供した場合に付与される。

(7) {<uCase, vGenitive> DP [uCase] {D D [vGenitive] {N NP}}}} (e.g. {<uCase, vGenitive> John [uCase] {D 's [vGenitive] {N party}}}})

また、特に(8a)で示されるデータに着目し、*there* が[uCase]を持たないとの想定の下で、(8a)の非文法性は、(8b)が簡潔に示すように  $\gamma$  の label が決定されず、interface で派生が破綻するためであると提案する。

(8) a. \*We imagined [there's being 5 men in the small room]. (Horn (1974: 118))

b. {<sub>γ</sub> there {D 's [vGenitive] {clause ...}}}} (γ=??)

この提案に基づくと、*there* 構文で付される label は簡潔に示すと(9)のようになる(本論では Richards (2008)に従い、*there* が phi-feature(厳密には[3-person])を持つと仮定する)。

(9) {<uCase, vGenitive> there {T T {R-v\* R-v\*, associate}}}}

この時、派生の中に<uCase, vTense>は存在しない。故に、*associate* に主格が付与されることはない。また<uCase, vTransitive>も存在しないため、*associate* にはデフォルト格として対格が付与されることが適切に予測できる。

さらに、この提案に基づくと、デフォルト格は(6)に挙げた間接包含による随意性条件によってだけでなく、そもそも[vTense]もしくは[vTransitive]を含む label に DP が含まれていない場合も付与されると考えられる。この予測に基づくと、Mad Magazine Sentence(=(10a))、Left Dislocation(=(10b))における格付与も説明可能である。

- (10) a. Me/\*I, I like beans. (Schütze (2001: 210))  
 b. What! Her/\*She call me up?! Never. (Akmajian (1984: 3, 一部修正))

#### 4. 英語及び日本語における帰結

本論の分析の帰結として、英語における Absolute Gerund が適切に捉えられる。Absolute Gerund とは(11)における角括弧で囲まれた Gerund であり、Pires (2007)によると Absolute Gerund は付加詞である。

- (11) Mike expected to win the game, [he/him being the best athlete in the school].  
 (Pires (2007: 196, 一部修正))

本論では Absolute Gerund は TP に付加していると想定し、以下の構造を示すと考える。

- (12) {C C {<uphi, vphi>, <uCase, vTense> {<uphi, vphi>, <uCase, vTense> Mike expected to win the game} {he/him being the best athlete in the school}}}

Hayashi (2021)の Immediately Contain の定義に基づくと、Absolute Gerund 内部の主語である *he/him* は<uCase, vTense>を提供してはいたため、当該の label に間接的に含まれることになる。本論の提案である(6)に基づくと、Absolute Gerund 内部の主語が間接包含による随意性条件により主格を得ることができただけでなく、デフォルト格として対格を得ることも簡潔に説明できる。

最後に日本語への帰結を見る。日本語では目的語が動詞と隣接している場合、対格付与が随意的だが、目的語が scrambling する場合、対格付与は義務的であるとされている(Saito (1985)他)。

- (13) りんごを/\*りんご<sub>i</sub> ジョンが<sub>i</sub> 食べた。(cf. ジョンが りんごを/りんご<sub>i</sub> 食べた。)

本論は Schütze (2001)が提示したデフォルト格の判断テストに従い、日本語におけるデフォルト格は顕在的な格が表出していないもの、つまり bare NP がデフォルト格を持つと結論づける。

上記の分析に基づき、日本語のデフォルト格が付与される場合の条件は(14a)が示すように、v\*P 内部で<uCase, vTransitive>を提供しない場合であると主張する(日本語の R は v\*の併合により強化されると想定する(Saito (2016)))。この場合、(14b)が示すように、label 付けの後、R が v\*に internal pair-Merge を行うことで v\*の phasehood が R に継承され、R の補部に留まっている目的語(「りんご」)は転送されてしまうため(Chomsky (2015))、後の統語操作、特にここでは scrambling に関与することができなくなると予測されるが(Phase Impenetrability Condition: Chomsky (2000))、それは実際(13)が示すように正しい予測である。

- (14) a. {<sub>γ</sub> ジョン {<sub>β</sub> {<sub>R</sub> りんご, R} v\*}}  
 b. {<sub>γ</sub> ジョン {<sub>β</sub> {<sub>R</sub> りんご, R} R-v\*}} (陰影は転送領域を示す)

一方、(15a)が示すように、目的語が R と共に<uCase, vTransitive>を提供する時、目的語は対格を義務的に得る。この時、目的語は(15b)が示すように転送領域に存在せず、scrambling が可能となる。

- (15) a. {<sub>γ</sub> ジョン {<uCase, vTransitive> りんごを {<sub>R</sub> りんご, R} v\*}}  
 b. {<sub>γ</sub> ジョン {<uCase, vTransitive> りんごを {<sub>R</sub> りんご, R} R-v\*}} (陰影は転送領域を示す)

また、これらの帰結に加え、日本語の主格目的語の scrambling も説明可能である。本論は、Moritake (2021)に従い、v\*P phase がキャンセルされており、v\*P では転送が行われないと想定することにより、格を持たない目的語の scrambling は原理的には可能となり、scrambling 後に主格付与が行われる。

<sup>1</sup> n.moritake.315@gmail.com

<sup>2</sup> EKS (2019)と Hayashi (2021)に従い、本論でも格付与は morpho-phonological component で行われると想定する。

#### <主要参考文献>

- Hayashi, Norimasa (2021) *Labels at the Interfaces: On the Notions and the Consequences of Merge and Contain*, Doctoral dissertation, Kyushu University.  
 Horn, George M. (1974) *The Noun Phrase Constraint*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.  
 Moritake, Nozomi (2021) “Nominative Objects and Scope in Japanese,” *JELS* 38, 191-197.  
 Schütze, Carson (1997) *Infl in Child and Adult Language: Agreement, Case, and Licensing*, Doctoral dissertation, MIT.  
 Sobin, Nicholas (2014) “Th/Ex, Agreement, and Case in Expletive Sentences,” *Syntax* 17, 385-416.